

が、かわいそうでなりません。七十歳を過ぎた現在も、思ひは遠く満州へ走ります。

撫順の思い出

静岡県 辻 フサコ

昭和十四年四月に満州の撫順に親戚を頼りに渡満致しました。縁あって満鉄の建設業をしている人と結婚しましたのが十六年で、十八年に長女が生まれ何不自由なく生活していました。其の内戦が激しくなり二十年五月末に主人は応召が来て吉林方面に行きました。八月に終戦となり其のまま消息が分かりませんでした。私達親子は其れから毎日つらい日が始まりました。満人部落なので日本人が少く暴動が始まりそうなので五里程離れた町に姉が住んでいる社宅が有りますので、そこへ何も持たずに二歳の子を連れ逃げ延びた。後で耳にしたのですが、私達が家を出た其の日に家中荒され、何も残らず持ち去

られたそうです。私達母子は本当の無一文の着たきり雀になりました。二十一年に、そろそろ内地引揚開始を耳にしたので、申込をして七月十日に撫順を出る事が確定したのでリュックの用意するのに一カ月程かかりました。長いヒモを作り、それに子供の体を結びその端で私の体を結び、リュックを背負い両手に色々提げ、リュックの横にヤカン、ナベをぶらさげ今、思い出せば本当に乞食の団体旅行でした。広場で荷物の検査が有り注射が済み、いよいよ歴史旅行が続けられたのです。第一に驚いた事は無蓋車に乗せられた事です。いつ日本に着くか分からぬ旅で本当に心細い複雑な毎日でした。十日程飲物に困りながら、やっとコロ島より大久丸に乗り込む事が出来ました。が、それから又、毎日、青々とした海の上を六日程ゆられながら玄海灘を通る時、荒波を見て子供が山が山がと口ばした時には私は一瞬この子を道連れに飛び込んで死のうと思いました。でも其の時、ふと頭に浮かんだ事は姉達と別れる時に荷物は取られても子供だけは未だ見ぬ日本の地を、ふませてやるのだよ、これこそ一番のお土産だよと云われた事を思い出し強い気持

に戻る事が出来ました。そして、やっと佐世保に上陸し五日程で夢に見た熊本の地に着きました。そして、それから一人娘が成長する三十四年迄は毎日毎日、血の出る様な世渡りでした。

満州より引き揚げて

宮崎県 日 高 萬壽子

私の母方の祖父は、台湾総督府が出来た時役人として台湾に渡り、母は明治三十年に台湾で生まれました。その後台湾で一緒だった後藤新平が初代満鉄総裁になられた時、招聘されて満州へ行き撫順炭鉱の庶務課長となり撫順炭鉱の基礎を築きました。父方の祖父は家族を長野県松本に置いて満州へ学校長として単身赴任していました。

私の父は旅順に中学校が出来た時に松本中学校から転校し、旅順中学の第一回卒業生となりました。現在の阪大を出て満鉄の地質調査部に勤務し、仲人でもある木戸

忠太郎（木戸孝允の息子）鞍山製鉄所を築きました。その後、父方の祖父と撫順で南満火工品会社を作り、後に日本火薬が買収に来た時父は会社を辞め大久保鉱業所を立し、ホテル石、シャモットその他の鉱山業を営んでいました。朝鮮にも鉱山があり、廃鉱となつている金山を戦時に日本政府が二十万で買いに来ました。

私は大正十一年大連で生まれ撫順で育ちました。満鉄マンの主人と結婚し結婚後まもなく主人は応召、同じ日に満鉄マンの兄も応召。父は普蘭店という所の支店の支店長が応召したので、そこへ仕事の応援にいらつていた時終戦となりました。父は技術者としてパロと呼ばれていた中国共産党に連行されました。姉婿は満州飛行機に就職していましたが、過労が元で終戦の年に亡くなりました。姉は我が家に帰ってきました。

二十一年二月、母と妹と私と女ばかりのところへ暴動が起きました。共産党が北へ逃げ、国民党がやってくる一日の無政府状態の時、我が家は暴動の中国人百人位に取り囲まれ襲われました。二階にいた私は逃げる間がなく、子供を背負って天井裏へ逃げ、生きた心地もあ